

平成20年度  
入学試験問題

国 語

特待生  
後期

受験番号	氏 名

中村中学校

□ 一 次の(1)～(10)の——線部のカタカナは漢字に直し、漢字はその読みを答えてください。

- (1) 医者でナイフク薬をもらう。
- (2) 日照り続きでキウスイ車が出動した。
- (3) 町のチアンを守る人々。
- (4) フジユんな天候が続いている。
- (5) 代金のサガクをはらう。
- (6) この薬品は揮発性の物質だ。
- (7) そうじ機の吸引力が弱くなってきた。
- (8) 熟練の腕をもっている。
- (9) 出窓に花びんをかざろう。
- (10) 家路を急ぐ人の群れ。

二

次の文に使われている慣用表現の意味を後から選**び**、記号で答えてください。

- (1) 彼には、目に物見せてやろう。
- (2) その話は頭が痛い。
- (3) 今回はあの人に口を利きいてもらおう。
- (4) ぼくの話はなを父は鼻であしらった。
- (5) おばあちゃんが目を細めて話を聞いていた。

ア、言葉巧たくみに言いくるめて、相手をだます。

イ、事がうまく運ぶように取り持つ。

ウ、懲こらしめひどい目にあわせる。

エ、勢力を持って人に知られるようになる。

オ、解決すべき問題をかかえ悩む。

カ、相手に利益を与え、自分を不利にする。

キ、たいそううれしそうな顔をする。

ク、相手の言うことをろくに聞かず冷淡れいたんにあつかう。

【三】 次の文章は、『未来形の読書術』という本から、第一章の初めの部分をぬき出したものです。よく読んで、後の問いに答えてください。

\*字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

あなたはなぜこの本を読んでいるのだろうか。いや、あなたはなぜこのページを読んでいるのだろうか。自分の部屋でくつろいでこのページを開いている人もいるかもしれないし、この本を買おうか買うまいか迷っている人もいるかもしれない。もしかすると、迷っている人の方が多いかもしれない。では、どうして迷うのだろうか。

A  
ぼくたちがもっとも本を集中して読むのは、実は本屋さんで立ち読みをするときだ。本屋さんで、本を買う前に中身をちょっと立ち読みする人は多い。そのとき、どうしてほかならぬこの本を買おうと思うのだろうか。誰かに買うように言われたから。役に立ちそうだから。必要に迫<sup>せま</sup>られたから。関心のあるテーマだから。面白そうだから。ただ何となく。これらに共通しているのは、みんなこの本を「読めばわかる」ことを前提としているということである。

① 「読めばわかる」と思うからその本を買う。しかし、本を買うのはそこに知らないことが書いてあると思うからでもある。あるいは、何が書いてあるかわからないからでもある。書いてあることがすべて知っていることばかりだったら、その本は買わないだろう。あるいは、「面白くない」という判断をするとき、その判断にはすでに知っているという前提があるはずだ。知らないことについて面白いか面白くないかは判断できないのだから。

「いや、自分には関係がないし必要もないから面白くないと判断したのだ」と反論する人がいるかもしれない。なるほど、そういう場合もあるにちがいない。では、どうして「自分には関係がないし必要もない」と判断できたのだろうか。それは、この本が「自分には関係がないし必要もない」ということを知っているからではないだろうか。ということは、この本を「自分には関係がないし必要もない」と判断したときに

は、もうこの本に書いてあることを知っていたのだ。

「わかりそうもないから買わないのだ」という人もいるかもしれない。こうくれば、ぼくがどう答えるかはもうわかるだろう。そう判断したとき、あなたはこの本が

「 I 」 「 I 」

「 I 」 「 I 」

ことを知っている」とはどういうことだろうか。あるいは、なぜそんなことがわかるのだろうか。

それは、自分を知っているからだ。自分が何を知っているのか、何を知らないのか、何がわかるのか、何がわからないのか、何に関心があるのか、何に関心がないのか、そういうことを知っているということである。この本を買うか買わないかを判断することは、本を前にして自分の知っていることや知らないことを確認することだったのだ。買うか買わないか迷うことは、本という鏡に自分を映すことだったのである。

まだ本を読み始めてもいないのに、もうこれだけのことがわかってしまったのだ。これだけでもこの本を手にした価値はあろうというものだなどと言ったら、ちよつと手前味噌みそかな。

ぼく自身は、自分に関わりかかりのない世界がこんなにもたくさんあると思いたくないために、いつも必要以上、能力以上の本を買ってしまう。文学を研究しているのに、現代思想や社会科学の分野の本をたくさん買う。ぼくならこれも読める、あれも読めると思っ③てしまうのである。いや、「思いたい」と言ったほうが正確かもしれない。ぼくの場合、

本という鏡に映った自分はいつも等身大の自分よりも肥大ひだいしているようだ。それは、自分自身に対する見栄みえのようなものかもしれない。

年間の本代が二百万円とか三百万円とか書いたりするものも（もちろん事実だが、人文系の研究者にとってはわざわざ書くほどの額でもない）、自分を鼓舞※こぶする気持ちがあるのかもしれない。以前はこれだけの本を全部読むのかと、妻に聞かれたものだ。いまでも、学生はそういう質問をする。そういうときには「本を買うのは趣味しゅみで、読むのが仕事だが、いまは趣味が高じている段階である」と答えることにしている。見

栄を張るのにもいろいろ屁理屈へりくつがいるのである。

それでも、この見栄がなくなったらぼくは教師としても、研究者としても終わりだと思っっている。直視するには、等身大の自分あまりに貧弱すぎる。だから、本を買う。専門外の本を買って、自分はこれだけ世界が広いと、自分自身に見栄を張るのである。

これは大学生の時から変わらない。ぼくが大学生の時には、図書館の本には裏表紙に貸し出し用のカードが付いていて、本を借りるときにはそれに名前を書き込む仕組みになっていた。そこで、ぼくはわかりもしないギリシャ哲学てつがくあたりから手当たり次第に借りまくって、ろくに読みもしないで返却へんきやくしていた。友人が引っかけた、「お前、あんな本まで読んでののかよ」と驚おどろいていた。知的な見栄を張るのは、青年の特権でもあり、義務でもある。

この年になればまさかそんなことはしないが、その代わりに自分自身に見栄を張るようになったわけだ。それは、ぼく自身の精神的せいしんな若さへの憧れあこがでもある。若いということは、いまの自分に満足していないということではなければならない。いまの自分に満足している若者は現実にはへたり込んだ精神的な「老人」である。精神的な「若者」は、いつもいまの自分に不満を抱かえている。だから、理想の自分へ「成長」しようともがくのである。それは少しもみつともない姿ではない。「大人」は⑤「若者」を温かく見守るものだ。

映画でも、アニメでも、ドラマでも、音楽でも、絵画でも、それらを前にしてぼくたちの心はこれだけ複雑な働きはしないのではないだろうか。誤解のないように言っておくと、これは本がこれらのメディアメディアよりもすぐれているという意味で言っているのではない。本はこれらとは何かが違うと言いたいだけなのである。

本には何かはよくわからないが、そして実際に読んでもわからないかもしれないに、自分が知らなければならぬこと、わかっておかなければならぬことが書いてあると、あなたは思っっているはずだ。本は自分を映す鏡だと考えれば、それはこうあ

りたいと願っている未来形の自分ということになる。つまり、いまよりは成長した自分である。

そういうあなたが読む限り、本はいつも新しい。現実には、未来に書かれた本はない。本はいつも過去に書かれている。当たり前の話である。しかし、本の中に未来形の自分を探したいと願う人がいる限り、本はいつも未来からやってくる。そのとき、本には未知の内容が書かれてあって、そこにはそうありたい自分が映し出されている。これは、理想の自己発見のための読書、未来形の読書と呼べそうだ。⑥ 古典を新しいと感じることがあるのは、そのためなのだ。本はそれを読む人の鏡なのだから、その人が読みたいように姿を変えるのである。

(石原千秋『未来形の読書術』)

※鼓舞……はげましふるい立たせること。

※メディア……情報伝達の手段。テレビ、新聞など。

問一 —— 線Aとありますが、立ち読みをするとき、わたしたちはどんなことに集中しているかと筆者は言っているのでしょうか。全体をよく読んでまとめてください。

問二 —— 線①とありますが、このとき本を買う人はどのように思っているものと筆者は述べていますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えてください。  
ア、その本の内容を理解できるかどうかはわからないが、自分の理解力をためすのに十分な内容が書かれていると思っています。

イ、その本の内容を読む前から知っていて、自分の中にあるどのような欲求を満たすのかもわかっているが、同時に面白いかどうかの判断もしている。

ウ、読む前にはその本の内容が全くわからず、自分の中にあるどのような欲求を満たすかも想像できない面白さが秘められていると思っています。

エ、その本を読めば内容が理解でき、自分の何らかの欲求を満たしてくれると思っているが、同時に自分の知らないことが書かれていると思っている。

問三 

I
---

 にあてはまる内容を五字以上十字以内で答えてください。

問四 —— 線②とありますが、この表現を言いかえたものとして最も適当なものを次から選び、記号で答えてください。

ア、自分で書いた本をこれ以上読まなくてもいいと言っていることになるかな。

イ、自分で書いた本の内容をちょっとだけ自分でほめていることになるかな。

ウ、自分で一生懸命書いた本だけれど、その良さを強調するのは遠慮しようかな。

エ、自分で書いた本に対して思いもしないお世辞を言っていることになるかな。

問五 —— 線③とありますが、どういうことですか。具体的に説明してください。



問六 ——— 線④とありますが、具体的にはどういう状態ですか。説明してください。

問七 ——— 線⑤とありますが、「そういう『若者』」とはどのような人のことを指していますか。説明してください。

問八 ——— 線⑥について説明した次の文の空らんにあてはまる内容を答えてください。

本は実際にはいつも（ア）に書かれている。ところが、（イ）が本に書いてあると考えると読めば、その本はその人にとって（ウ）の姿を表したものになる。そういうふうに本をとらえて、本を読む人にとっては、常に本は（ウ）がいる未来からやってくると言えるのである。

※二つある（ウ）には同じ内容が入ります。

四 次の文章を読み、後の問いに答えてください。

「白」はまっ白の犬です。ある春の日、仲よしの黒犬である「黒」という犬が犬殺しにねらわれているのを見つけます。しかし、「黒」を助けようとすれば、今度は自分が犬殺しに殺されることがわかった。「白」は、「黒」を助けることができません。「黒」の助けを求める鳴き声を聞きながら、「白」は一目散に逃げてしまいました。やっこのことで「白」は自分の家に帰ってきましたが、主人である「お嬢さん」「坊ちゃん」は「白」のことをよその犬のようにあつかい、追い払おうとします。なぜなら、「白」は体の色がまっ黒に変わってしまったっており、「お嬢さん」と「坊ちゃん」には、「白」だということがわからなかったからです。

「お嬢さん！ 坊ちゃん！ わたしはあの白なのですよ。いくらまっ黒になっていても、やっぱりあの白なのですよ」

白の声は何とも云われぬ悲しさと怒りとに震えていました。けれどもお嬢さんや坊ちゃんにはそう云う白の心もちも呑みこめる筈はありません。現にお嬢さんは憎らしそうに、「まだあすこに吠えているわ。ほんとうに凶しい野良犬ね」などと、地だんだを踏んでいるのです。坊ちゃんも、——坊ちゃんは小径の砂利を拾うと、カ一ぱい白へ投げつけました。

「畜生！ まだ愚図々々しているな。これでもか？ これでもか？」砂利は続けざまに飛んで来ました。中には白の耳のつけ根へ、血の滲む位当たったものもあります。

白はどうとう尻尾を巻き、黒塀の外へぬけ出しました。① 黒塀の外には春の日の光に銀の粉を浴びた紋白蝶が一羽、気楽そうにひらひら飛んでいます。

「ああ、きょうから宿無し犬になるのか？」

白はため息を洩らしたまま、少時は唯電柱の下にぼんやり足をとめていました。

お嬢さんや坊ちゃんに逐い出された白は東京中をうろろ歩きしました。しかし何処へどうしても、忘れることの出来ないのはまっ黒になった姿のことです。白は客の顔を映している理髪店の鏡を恐れました。雨上りの空を映している往来の水たまりを恐れました。往来の若葉を映している飾窓の硝子を恐れました。いや、カフェのテエ

ブルに黒ビイルを湛たえているコップさえ、——けれどもそれが何になりましたしょう？  
あの自動車を御覧なさい。ええ、あの公園の外にとまった、大きい黒塗くろぬりの自動車です。漆うるしを光らせた自動車の車体は今こちらへ歩いて来る白の姿を映しました。——はつきりと、鏡のように。白の姿を映すものはあの客待ちの自動車のように、到いたるところにある訣わけなのです。もしあれを見たとすれば、どんなに白は恐れるでしょう。それ、白の顔を御覧なさい。白は苦しそうに唸うなったと思うと、忽たちまち公園の中へ駈かこみました。公園の中には鈴懸すずかけの若葉にかすかな風が渡っています。白は頭を垂たれたなり、木木の間を歩いて行きました。此処ここには幸い池の外ほかには、姿を映すものも見当りません。物音は唯ただ白薔薇しろばらに群れる蜂はちの音が聞えるばかりです。白は平和な公園の空気に、少時は醜みにくい黒犬になった日ごろの悲しさも忘れていました。

しかしそう云う幸福さえ五分と続いたかどうか分かりません。白は唯夢ただのように、ベンチの並んである路みちばたへ出ました。するとその路の曲り角の向こうにけたたましい犬の声が上がったのです。

「きゃん。きゃん。助けてくれえ！ きゃあん！ きゃあん。助けてくれえ！」

③ 白は思わず身震いをしました。この声は白の心の中へ、あの恐ろしい黒の最後をもう一度はつきり浮うばせたのです。白は目をつぶったまま、元来もとた方へ逃げ出そうとしました。けれどもそれは言葉通り、ほんの一瞬いっしゆんの間のことです。白は凄すさまじい唸り声を洩らすと、きりりと又振り返りました。

「きゃあん。きゃあん。助けてくれえ！ きゃあん。きゃあん。助けてくれえ！」

この声は又白の耳にはこう云う言葉にも聞えるのです。

「きゃあん。きゃあん。臆病おくびょうものになるな！ きゃあん。臆病ものになるな！」

白は頭を低めるが早いか、声のする方へ駈け出しました。

けれども其処そこへ来て見ると、白の目の前へ現れたのは犬殺しなどではありません。唯ただ学校の帰りらしい、洋服を着た子供が二三人、頸くびのまわりへ縄をつけた茶色の子犬を引きずりながら、何かわいわい騒さわいでいるのです。子犬は一生懸命けんめいに引きずられま

いともがきもがき、「助けてくれえ」と繰り返していました。しかし子供たちはそんな声に耳を借すけしきもありません。唯笑ったり、怒鳴ったり、或は又子犬の腹を靴で蹴ったりするばかりです。

白は少しもためらわずに、子供たちを目がけて吠えかかりました。不意を打たれた子供たちは驚いたの驚かないのではありません。又實際白の容子は火のように燃えた眼の色と云い、刃物のようにむき出した牙の列と云い、今にも噛みつくかと思つた位、恐ろしいけんまくを見せているのです。子供たちは四方へ逃げ散りました。中には余り狼狽したはずみに、路ばたの花壇へ飛びこんだのもあります。白は二三間追いかけた後、くるりと子犬を振り返ると、叱るようこう声をかけました。

「さあ、おれと一しよに来い。お前の家まで送ってやるから」

白は元来た木木の間へ、まっしぐらに又駈けこみました。茶色の子犬も嬉しそうに、ベンチをくぐり、薔薇を蹴散らし、白に負けまいと走って来ます。まだ頸にぶら下った、長い縄をひきずりながら。

二三時間たった後、白は貧しいカフェの前に茶色の子犬と佇んでいました。昼も薄暗いカフェの中にはもう赤あかと電燈がともり、音のかすれた蓄音機は浪花節か何かやっているようです。子犬は得意そうに尾を振りながら、こつこつ白へ話しかけました。

「僕は此処に住んでいるのです、この大正軒と云うカフェの中に。——おじさんは何処に住んでいるのです？」

「おじさんかい？ おじさんは——ずっと遠い町にいる」

白は寂しそうにため息をしました。

「じゃもうおじさんは家へ帰ろう」

「まあお待ちなさい。おじさんの御主人はやかましいのですか？」

「御主人？ なぜ又そんなことを尋ねるのだい？」

「もし御主人がやかましくなければ、今夜は此処に泊って行って下さい。それから僕のお母さんにも命拾いの御礼を云わせて下さい。僕の家には牛乳だの、カレエ・ライ

スだの、ビフテキだの、いろいろな御馳走ごちそうがあるのです」

「ありがとうございます。だがおじさんは用があるから、御馳走になるのはこの次にしよう。——じゃお前のお母さんよろしく」

白はちよいと空を見てから、静かに敷石しきいしの上を歩き出しました。空にはカフェの屋根のはずれに、三日月もそろそろ光り出しています。

「おじさん。おじさん。おじさんと云えば！」

子犬は悲しそうに鼻を鳴らしました。

「じゃ名前だけ聞かして下さい。僕の名前はナポレオンと云うのです。ナポちゃんだのナポ公だのとも云われますけれども。——おじさんの名前は何と云うのです？」

「おじさんの名前は白と云うのだよ」

「白——ですか？ 白と云うのは不思議ですね。おじさんは何処も黒いじゃありませんか？」

⑥ 白は胸が一ぱいになりました。

「それでも白と云うのだよ」

「じゃ白のおじさんと云いましょう。白のおじさん。是非又近い内に一度来て下さい」

「じゃナポ公、さよなら！」

「御機嫌好ごきげんよう、白のおじさん！ さようなら、さようなら！」

〈中略〉

その後、「白」は人や動物の命を救うために勇ましく働きます。猛火につつまれる家の中から幼児を救い、動物園から逃げ出した狼おおかみをねじ伏せたこともありました。それらの働きが新聞でも報道され、人々の知るところになりました。

或秋あるの真夜中です。体も心も疲れ切った白は主人の家へ帰って来ました。勿論もちろんお嬢さんや坊ちゃんはどうに床とこへはいつています。いや、今は誰一人起きているものもあ

りますまい。ひっそりした裏庭の芝生の上にも、唯高い棕櫚の木ただ しゅろ こざえの梢こざえに白い月が一輪浮んでいるだけです。白は昔の犬小屋の前に、露つゆに濡れた体を休めました。それから寂しい月を相手に、こういう独語ひとりごとを始めました。

「お月様！ お月様！ わたしは黒君を見殺しにしました。わたしの体のまっ黒になったのも、大かたそのせいかと思っています。しかしわたしはお嬢さんや坊ちゃんにお別れ申してから、あらゆる危険と戦って来ました。それは一つには何かの拍子ひょうしに煤すすよりも黒い体を見ると、臆病はを恥じる気が起ったからです。けれどもしまいに黒いのがいやさに、——この黒いわたしを殺したさに、或あるは火の中へ飛びこんだり、或は又狼と戦ったりしました。が、不思議にもわたしの命はどんな強敵にも奪うばわれません。死もわたしの顔を見ると、何処かへ逃げ去ってしまうのです。わたしはどうとう苦しきの余り、自殺をしようと決心しました。唯ただ自殺をするにつけても、唯ただひとめ一目会いたいの可愛かわいがって下すった御主人です。勿論お嬢さんや坊ちゃんはあしたにもわたしの姿を見ると、きっと又野良犬と思うでしょう。ことによれば坊ちゃんのバットに打ち殺されてしまうかも知れません。しかしそれでも本望ほんもうです。お月様！ お月様！ わたしは御主人の顔を見る外に、何も願うことはありません。その為ために今夜ははるばるともう一度此処へ帰って来ました。どうか夜の明け次第、お嬢さんや坊ちゃんに会わして下さい」

白は独語を云い終ると、芝生に顎あごをさしのべたなり、何時いつかぐっすり寝入っていました。

「驚いたわねえ、春夫さん」

「どうしたんだらう？ 姉さん」

白は小さい主人の声に、はっと目を開きました。見ればお嬢さんや坊ちゃんたんずは犬小屋の前に佇たんずんだまま、不思議そうに顔を見合せています。白は一度挙げた目を又芝生の上へ伏せてしまいました。お嬢さんや坊ちゃんは白がまっ黒に変わった時にも、やはり今のように驚いたものです。あの時の悲しさを考えると、——<sup>⑨</sup>白は今では帰って

来たことを後悔する気さえ起りました。するとその途端です。坊ちゃんは突然飛び上ると、大声にこう叫びました。

「お父さん！ お母さん！ 白が又帰って来ましたよ！」

白が！ 白は思わず飛び起きました。すると逃げるとでも思ったのでしょうか。お嬢さんは両手を延ばしながら、しっかりと白の頸を押えました。同時に白はお嬢さんの目へ、じっと彼の目を移しました。お嬢さんの目には黒い瞳にありありと犬小屋が映っています。高い棕櫚の木のかげになったクリイム色の犬小屋が、——そんなことは当然に違いありません。しかしその犬小屋の前には米粒程の小ささに、白い犬が一匹坐っているのです。清らかに、ほっそりと。——<sup>⑩</sup>白は唯恍惚とこの犬の姿に見入りました。

「あら、白は泣いているわよ」

お嬢さんは白を抱きしめたまま、坊ちゃんの顔を見上げました。坊ちゃんは——御覧なさい、坊ちゃんの威張っているのを！

「へっ、姉さんだって泣いている癖に！」

(芥川龍之介『白』)

※恍惚と……うっとりど。

問一 —— 線①の描写についての説明として、最もあてはまるものを次から選び、記号で答えてください。

ア、春の光をいっばいに浴びる紋白蝶は、まさにこの世の春の主役であり、悲劇の主人公である「白」をあざ笑うかのようなものである。

イ、きらきらと銀に輝く紋白蝶は、生きる苦しみなど想像がつかないようであり、すっかり落ち込んだ「白」を明るくはげますかのようなものである。

ウ、ひらひらと飛ぶ紋白蝶は、ついさっきまで楽しく暮らしていた「白」自身のようにであり、現在の不幸な「白」とは対照的である。

エ、塀の外で気楽そうに飛ぶ紋白蝶は、決まった住みかのない「白」自身のようにであり、「白」の解放的な生き方を表している。

問二 —— 線②とありますが、「白」が恐れる理由を説明してください。

問三 —— 線③とありますが、「黒の最後」が浮かび上がったことで、「白」にどのような気持ちの変化があらわれたのかを説明してください。

問四 —— 線④で使われている表現技法を次から二つ選び、記号で答えてください。

ア、直喩ちよくゆ

イ、省略

ウ、倒置

エ、対句

オ、擬人法ぎじん



問五 —— 線⑤とありますが、「白」がこのように答えた理由として、最もあてはまるものを次から選び、記号で答えてください。

ア、主人に追い出された悲しみを忘れるために、できるだけ自分の家から遠くはなれてしまおうと思い、ここまでやってきたから。

イ、自分の家は、もはや自分のなれ親しんだ家と違ってしまっており、家での楽しい日々も遠い昔のようだったから。

ウ、子犬をいじめていた子供たちから逃げようと夢中になって走っているうちに、二三時間もかかるほど遠くまでできてしまっていたから。

エ、罪を犯した自分は、もはやこの世に存在することを許されず、死んで遠い世界にいったような気持ちだったから。

問六 —— 線⑥とありますが、このときの「白」の気持ちとしてあてはまらないものを一つ選び、記号で答えてください。

ア、まっ白だった自分が、不幸な出来事からまっ黒に変わったことには、確かに運命の不思議を思わずにはいられないでいる。

イ、自分の黒さを改めて指摘され、黒く変わったきっかけや黒くなったことでもたらされたつらい出来事を思い、悲しみが胸にせまってきている。

ウ、体の色が変わってしまっても、「白」と名づけられ、主人にもかわいがられてきた本来の自分を失いきれないでいる。

エ、子犬はともに危険を乗りこえた仲間であるのに、それでも黒い自分の悲しみを理解してもらえないことを知り、寂しさがこみあげてきている。

問七 —— 線⑦の描写についての説明として、最もあてはまるものを次から選び、記号で答えてください。

ア、自分のもとの家であっても、よそよそしさを感じてしまう「白」の落ち着かない気持ちを表している。

イ、自分の罪を明らかにすることをせまられている「白」の、追いつめられた状況を表している。

ウ、かわいがってくれる人もおらず、話を聞いてくれる者も月以外にないという「白」の孤独を表している。

エ、生きる気力を失い、運命に見放され、やがて死のうとしている「白」の絶望を表している。

問八 —— 線⑧とありますが、あらゆる危険と戦って来たもう一つの理由として最もあてはまるものを次から選び、記号で答えてください。

ア、過去の罪をつぐなう気持ちを表現しようと思ったため。

イ、自分の存在を自分で認めることができなくなったため。

ウ、危険にあふれた世の中を生きるのが嫌になったため。

エ、悪をにくみ、許してはならないという思いがあったため。

問九 —— 線⑨とありますが、「白」がこのような気持ちになった理由を説明してください。

問十 —— 線⑩とありますが、このときの「白」の気持ちを説明してください。